

今週の為替相場見通し(2020年8月24日)

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	(円)		105.10 ~ 106.70	105.81	104.50 ~ 106.80
ユーロ	(ドル)		1.1755 ~ 1.1966	1.1796	1.1750 ~ 1.2050
(1ユーロ=)	(円)		124.46 ~ 126.44	124.82	124.50 ~ 126.50
英ポンド	(ドル)		1.3059 ~ 1.3276	1.3090	1.2980 ~ 1.3200
(1英ポンド=)	(円)	*	138.26 ~ 139.96	138.49	137.50 ~ 139.50
豪ドル	(ドル)		0.7137 ~ 0.7275	0.7160	0.7025 ~ 0.7275
(1豪ドル=)	(円)	*	75.61 ~ 76.68	75.77	74.50 ~ 77.00

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

市場営業部 為替営業第二チーム 山口 朋子

(1) 今週の予想レンジ: 104.50 ~ 106.80 円

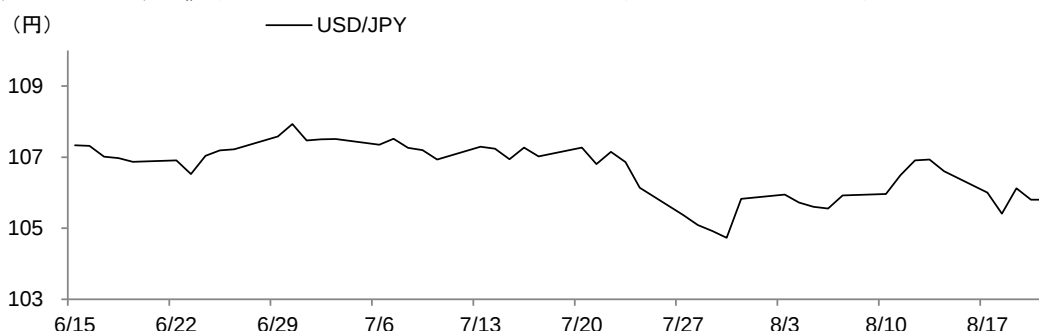
(2) ポイント【先週までの回顧と今週の見通し】

先週のドル/円相場は下落する展開。週初17日、106円台後半と週高値圏でオープンしたドル/円は材料難の中、東京市場は動意に乏しい推移。その後、海外市場では新型コロナ感染拡大、米追加経済対策で与野党協議の難航、さらに発表された米8月ニューヨーク連銀製造業景気指数の大幅な悪化を受けて、105円台後半まで下落。翌18日も、米中対立激化への警戒感や前日のドル売り優勢地合いが継続する中で、ドル/円は105円台前半まで続落。19日の朝方には週安値となる105.10円を付けた。ただし、この日発表された7月の米連邦公開市場委員会(FOMC)議事要旨で追加緩和期待が後退すると、米金利は反転上昇し、ドル円は106円台前半まで戻した。20日に発表された米新規失業保険申請件数は110.6万件と、前週から大幅に増加したこと、雇用環境の大幅な改善に対する市場の期待は低下し、米金利は再び反落。リスク回避的なドル売りが優勢となり、ドル/円は105円台後半まで下落。21日に発表された米7月中古住宅販売件数は大幅な増加となったことや、米8月マークイット製造業PMI速報値が市場予想を上回ると、リスク回避的なドル売りは縮小し、ドル/円は、105.81円で越週した。

今週のドル/円も上値重く推移すると予想される。注目の経済指標は25日の米8月消費者信頼感、27日の米4-6月期GDP(改定値)と28日の米7月個人所得・個人支出である。また、市場参加者の米金融政策に対する関心が一段と高まっており、27日のジャクソンホール経済シンポジウムでのパウエルFRB議長の金融政策に関する講演に注目が集まる。先週公表された7月開催のFOMC議事要旨は下半期の景気回復に対する楽観を弱め、利回りの上限設定はメリットが小さいと金利ガイダンスを明確にするとの姿勢を後退させた。イーランド・カーブ・コントロール導入については、「多くのメンバーが現時点での設定は正当化されない」との見解を提示していたことが判明した。パウエルFRB議長が経済の先行きに関する不確実性やフォワードガイダンスの強化について訴える等、ハト派な内容となるとドル売り圧力が強まるだろう。また、24日から米共和党大会でトランプ大統領が演説を行う。政治リスクが高まることとなると、ドルは買いにくい状況となるだろう。

(3) 先週までの相場の推移

先週(8/17~8/21)の値動き: 安値 105.10 円 高値 106.70 円 終値 105.81 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

市場営業部 為替営業第二チーム 小林 元子

(1) 今週の予想レンジ: 1.1750 ~ 1.2050 124.50 ~ 126.50 円

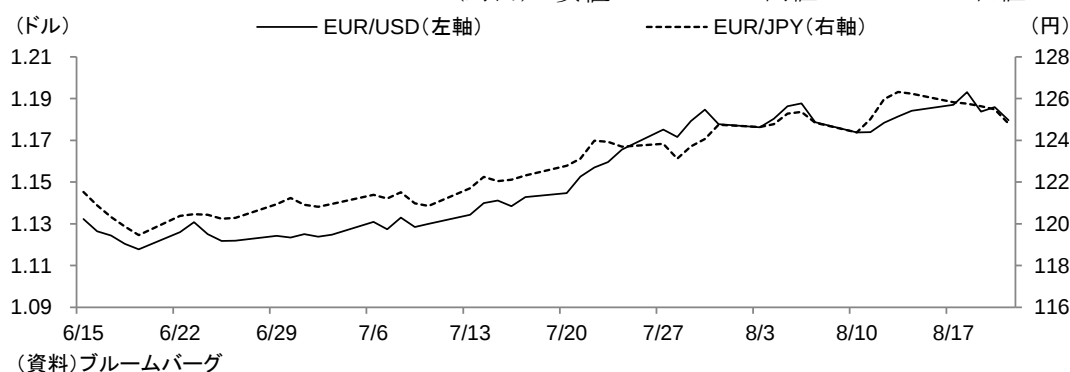
(2) ポイント【先週までの回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドル相場は、年初来高値を更新する展開。週初17日、1.18 台半ばでオープンしたユーロ/ドルは、1.18 台前半まで弱含むも、米8月ニューヨーク連銀製造業景気指数の結果や米金利低下を背景にドル売りが強まると1.18 台後半まで上昇した。18日にかけてストップロス巻き込みながら、ユーロ/ドルは一時年初来高値となる1.1966まで急伸。翌19日は、ドル売り優勢地合いの中、ユーロ/ドルは1.19 台前半で底堅く推移。その後は、持ち高調整や米FOMC議事要旨の内容を受けたドル買いに、ユーロ/ドルは1.18 台前半まで値を下げた。20日には、米経済指標が予想以上に悪化したことを受けてドル売りが強まると、ユーロ/ドルは1.18 台後半まで上昇したが、その後は利益確定の売りが強まり1.1803をつけた。しかし米金利低下が継続する中で、ユーロ/ドルは1.18 台後半まで反発した。21日は、フランスやユーロ圏の8月PMIが予想以上に低調な結果(独8月製造業PMIは予想を上回ったものの、総合PMIは予想を下回った)だったことからユーロ売りが加速。早朝にバルニエEU首席交渉官がブレグジットを巡り「現段階では英国との合意の公算は小さい」と述べ、ブレグジット交渉の先行き不透明感が高まる中、ボンドの下落につれ安となり、1.1772をつけた。ユーロ売り一服後、1.1790まで上昇するも、その後は米経済指標の結果が予想を上回ったことからドル買いが強まり、1.1755まで安値更新し、その後1.1798まで買い戻され、1.1796でクローズ。

来週のユーロは上昇を予想。ECBが20日公表した議事要旨では、景気見通しと必要な金融緩和の規模について不透明感が強く意見がわかれた様子がうかがえた。要旨から、新型コロナウイルスの感染拡大に伴うロックダウンが解除された直後、景気回復の早期兆候が示されたものの、チーフエコノミストのレーン理事は、回復の広がりや度合いは一律でなく部分的だと指摘。一方、パンデミック緊急購入プログラムに割り当てた1兆3500億ユーロは、購入額目標というよりも、上限と捉えるべきとの意見もあり、今後の動きは読みにくい。しばらくは現状維持が継続されるとすると、ユーロの買い戻しは継続されるだろう。重要指標の発表は25日(火)に独GDP(確報)、28日(金)仏CPI(速報)、仏GDP(確報)の発表が予定されている。

(3) 先週までの相場の推移

先週(8/17~8/21)の値動き: (対ドル) 安値 1.1755 高値 1.1966 終値 1.1796
(対円) 安値 124.46 高値 126.44 終値 124.82



3. 英ポンド

欧州資金部 森田 大貴

(1) 今週の予想レンジ: 1.2980 ~ 1.3200 137.50 ~ 139.50 円

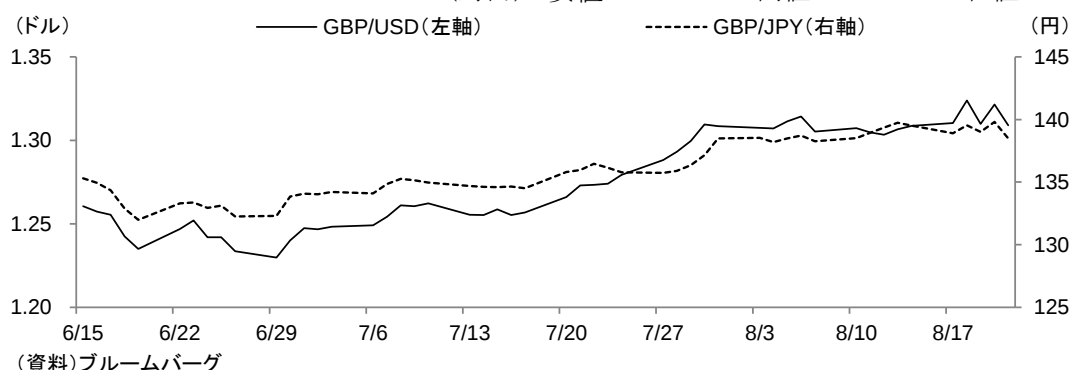
(2) ポイント【先週末までの回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は、対ドルでは上に往って来いの動きを繰り返し、結局前週末比同水準でクローズ。対円では上下を繰り返しながら週間では下落、対ユーロでは週後半に上昇後クローズに向けて上げ幅を削る展開。週初17日、対ドルで1.30台後半、対円で139円台半ばレベルでオープン。週初は動意薄で小動きながら、季節性の円買いフローが入っていたと見られ、英ポンドは対円で139円割れまで下落。翌18日、金価格が上昇する動きや、米S&P500が最高値を更新する動きに合わせドル売りが強まり、8/6高値1.3185や心理的節目である1.32を超えるとテクニカル要因も相まって、対ドルでは1.32台後半、対円でも140円目前まで上昇。しかし19日、FOMC議事要旨発表前からポジション調整の動きが強まり、議事要旨においてもYCCに否定的な見解が示されたことから、株下落、金下落、ドル買いの動きが加速。翌20日にかけて対ドルでは1.30台半ばまで調整。NY時間に入ると、特段固有の材料は見当たらないものの、底堅い米株の動きに合わせドルが売り返される動きとなり、EURGBPが0.90を割れてロングのアンワインドが加速したことも英ポンドをサポートし、対ドルでは1.32超えまで急伸。前日の高値水準まで戻す荒い動きとなった。しかし21日、欧州時間に入ると、フランスをはじめとするユーロ圏各国のPMI速報値が低調な結果となると、EURが高値圏から一気に下落を開始。EURGBPも週安値となる0.8945まで下げ幅を拡大する中、GBPも対ドルではつれ安となり欧州入りの1.32台半ばからあっさりと1.32割れ。この間、英7月小売売上高、8月PMI速報値はそれぞれ予想を上回る良好な結果となったものの材料視されず。さらに、この週行われたEUとの通商交渉を巡って、バルニエ首席交渉官から「現段階で英国とEUが合意できる公算は小さいように思われる」とネガティブな発言が出たことが嫌気され、GBP売りが加速。1.31を割るレベルまで大幅に下落し、ロンドン16時のタイミングでは需給要因も加わり週安値となる1.3059を示現。この間、対円でも欧州入りレベルである140円手前から、138円台前半まで2円弱の大幅下落。ニューヨーク時間には米株が持ち直したことからややドル売りの動きとなり、対ドルでは1.30台後半で越週した。

今週の英ポンド相場は上値の重い展開ながら、下げ渋る展開を予想。先週は、対ドルでは3月9日の高値1.3200を明確に上抜けた英ポンドであったが、週末金曜日に欧州サイドでネガティブな材料が出たことから、高値圏にあった欧州通貨は調整を余儀なくされ、結局前週末と同水準でのクローズとなった。特に、先週18日からのEUとの通商交渉を終えたバルニエの“At this stage, an agreement between the UK and the EU remains unlikely.”という表現はやや悲観的なトーンの強い印象であり、欧州通貨は対ドルでは依然高値水準にいたいことを考えれば、週初はフォロースルーで上値が重くなる可能性は十分考えられよう。一方で、目先の交渉の難航自体はマーケットで既に織り込まれており、ヘッドラインに反応した英ポンド売りの反応は、ドルショートポジションが積みあがる中での週末に向けたポジション調整の側面も大きかったと考えられる。また、今週発表された英経済指標は、8月データであるPMIは飲食店を支援する“eat out to help out”の影響もあったものの、小売も含めいずれも予想を上回る良好な結果となっている。8月半ばに見せた米長期金利の上昇も一服しており、今週のFOMC議事要旨後のドル買いの反応もごく短期的、かつ米株は高値圏で依然としてリスクオフ的な環境が優勢であることに鑑みれば、米実質金利の低下を背景とした大きなドル売りの流れに変化はないと考えられる。加えて、今週は週後半(27、28日)にジャクソンホール会議を控え、また月末フローに左右されやすく、先週末の流れが一方方向で続く展開とはなりづらいだろう。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(8/17~8/21)の値動き: (対ドル) 安値 1.3059 高値 1.3276 終値 1.3090
(対円) 安値 138.26 高値 139.96 終値 138.49



4. 豪ドル

アジア・オセアニア資金部 シドニー室 安藤 愛

(1) 今週の予想レンジ: 0.7025 ~ 0.7275 74.50 ~ 77.00 円

(2) ポイント【先週までの回顧と今週の見通し】

先週の豪ドル相場は0.72台後半まで上昇した後、再び0.71台後半まで下落。17日、週末に計画されていた米中第一弾貿易合意に関する協議が無期延期されたとの報道に加え、豪ビクトリア州が非常事態宣言を9月半ばまで延長との発表を受けて、豪ドルは先週末終値から下落してギャップオープン。その後は押し目買いからじりじりと上昇。欧米時間に一段の株高が進行すると豪ドルは0.72の上抜けに成功。18日、8月RBA理事会議事要旨では現時点で追加緩和措置を実施する必要はないとの見解が改めて示され、市場の反応は限定的。NY市場時間に発表された7月住宅着工件数が予想外に強い結果となったが米ドルは売りで反応。豪ドルは一時0.72半ばまで上昇した。19日、7月FOMC議事要旨では国債利回りに一定の上限や誘導目標を設けるイールドカーブ・コントロールに消極的な姿勢が示されたことを受けて、金融緩和強化の観測が後退し米国債利回りは上昇、米ドル高の反応となり、豪ドルは一気に0.7180台まで下落した。20日、前日のFOMC議事要旨を受けた米ドル上昇の流れを引き継ぎ、アジア時間かけて売りが優勢に。米新規失業保険申請件数が予想外に増加したことを受けて米ドルへの逃避買いが強まると豪ドルは一旦0.7130台まで下落するが、その後ハイテク株主導で株価が上昇すると買い戻しの動きが入り0.7190台まで上昇。21日、米8月PMIが予想以上に良好な結果だったことを受けて米ドルに買いが入ると豪ドルは0.7130台まで再度下落。その後0.7160近辺まで戻して引けた。

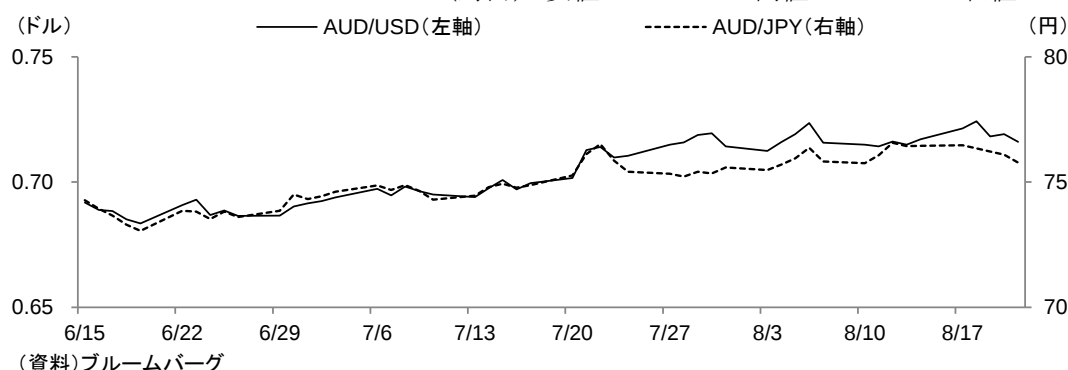
今週の豪ドルは底堅い値動きを予想する。7月の豪ドル高を支えていた強烈な米ドル売りの流れが8月に入り一旦休止しているが、先週は米ドル買いの局面でも豪ドルは大きく値を崩すことなく、底値の堅さを示した。新型コロナウイルス新規感染者の急増で懸念が広がっていたビクトリア州では、数日前から新規感染者が低水準となっており、楽観的なムードとなってきた。27～28日に米ジャクソンホールで開催されるカンザスシティ連銀年次経済シンポジウムにてパウエルFRB議長が講演を予定しており、大きな注目が集まる。その講演で大きなサプライズが無い限り、豪ドルはレンジで上下しつつ、じりじりと値を切り上げてくる展開を予想する。

(3) 先週までの相場の推移

先週(8/17～8/21)の値動き:

(対ドル) 安値 0.7137 高値 0.7275 終値 0.7160

(対円) 安値 75.61 高値 76.68 終値 75.77



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償のみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。